編集方針

芳賀　徹（「日本研究・京都会議」実行委員会副委員長
同上報告集編集委員会委員長・国際日本文化研究センター）
HAGA Toru

1994年10月17日（月）～22日（土）の一週間にわたって催された「日本研究・京都会議」（Kyoto Conference on Japanese Studies）の報告論文集を、会議から一年半後の今日、ようやく刊行するはこびとなった。

第一日の大江健三郎、Marius B. Jansen 両氏による記念講演から始まって、最終日（10月21日）の源了圓氏を座長とするシンポジウムと梅原猛前所長の講演にいたるまで、内外からの約670名の参加者によって、総計約290の研究発表と討議がさまざまのかたちで展開された会議であった。会議の組織委員、実行委員として、また報告者、座長、討論者として会議に参加し、熱意をもってこれを盛りあげてくれた皆さまと、会議の裏方として綿密で円滑な運営に当ってくれた日文研管理部および国際交流基金事務局の方々に、ここであらためて深甚の謝意を表する次第である。

本報告集は、京都会議に提出され報告された後、報告者自身によって改訂された論文を主体とするが、幾つかのパネルについては、論文を別なかたちで刊行する予定があるため、本報告集には収録しなかった場合もある。そのような場合も含めて、会議の議事日程はプログラムに従ってすべてこれを掲載し、本報告集にもう一つ会議記録としての性格をももたせることとした。

以下に、本報告集編集に当って編集委員会が定めた方針を列挙し、関係者諸氏の御理解を得たいと思う。

A　掲載論文について――

1）原則として、提出された原稿どおりに印刷した。
2）1995年度内に報告集完成の必要があるため、作業期間が制限され、原則として著者校正は行わなかった。
3）明らかにミスタイプと思われる箇所は編集委員会において校訂した。
4）論文に付された注は、すべて文末に移して統一した。注番号の表記法は、執筆者によってさまざまであったが、誤写をおそれて統一を避け、すべて原稿のままとした。
5）論文掲載の順は、すべて京都会議のプログラムどおりとした。
6）論文の提出がなかった人でも、レジュメが出されていた場合には、巻末に中目次を付してレジュメを一括して掲載した。論文もレジュメもない場合には、中目次に発表者氏名、所属、論文題名のみを記載した。

B　発表者名の表記等について――

1）日文研が作成した中目次においては、執筆者名はそれぞれの国の慣習に従って表記した（例

えば、欧米人であれば「名・姓」の順、日本人であれば「姓・名」の順)。

2）各論文題名の次に掲げる執筆者名は、中目次との整合性のため、一部表記順を変更した。

3）執筆者の所属、身分などについては、原則としてプログラム所載の1994年10月のものを記載した。ただし、提出論文に記載の所属がそれと異なる場合、また編集委員会に通知があった場合には、新しい方を取った。

4）論文の提出がなかった場合、また論文提出の必要のない座長等の場合には、記録のためにプログラム所載の所属・身分のままとした。

以上、本報告集全四冊が、1994年秋10月の、あの満月の夜をも含む京都桂坂の一週間の会議を彷彿として喚起させ、今後の国際的な日本研究のさらなる発展をうながす一契機ともなることを、心から願っている。